

観光客でしかないのだけれども

杭州客運碼頭（客船乗り場）のチケット売場は閑散としていた。窓口は閉ざされていた。どうやら昼休みらしい。窓口の脇に、一二時に再開するという掲示があった。数人が窓口を覗き込んだり、船の運航表や料金表を眺めたりしていた。

窓口が開くまで一時間ほどあったので、行李寄存処（手荷物預かり）に重たい荷物を預けて（一元）身軽になったあと、近所の食堂で肉絲面（ラーメン）を食べた。

チケット売場に戻ると、窓口の前には一〇人前後の列ができていた。壁に掲げられた運航表を見ると、蘇州行きの船は午後五時半発だった。即座に今日の船に乗ることに決めた。五時間もあれば、西湖は十分に堪能できるだろう。それに杭州でホテル捜しをするのは一昨日の夜、苦労したことを思い出してもあまり気が進まなかった。

料金表の方に日をやると、臥輔（ベッド）が一等から五等まであり、いちばん安いのは散席つまり、自由席だった。

窓口の掲示を見ると、それぞれのベッドや席について「有」と「無」が示してある。

料金と予約情況を考えあわせて、四等のベッドに決めた。一九・八元。いくら安くても一晚を船中で過ごすのだから、散席は避けたかった。

上海の海佳飯店で同室だった女性が、大連までのチケットを一六〇円で買わされたことを思い出し、

「今晚、到蘇州、四等（チンワン、タオスーチョオ、ストーン）」

と口の中で何度も繰り返しながら、緊張して人民幣を握りしめた。

蘇州行きの船のチケットは意に反して簡単に手にいれることができた。窓口の女性は「四等？」と聞き返したあと、投げるようにチケットと釣銭を突き出した。本来ならば、ムツとするとところなのだけれども、チケットを手に入れた嬉しさがはるかにまさっていた。

顔のほころびを噛みしめるように、当然という顔をしてチケットをポケットにしまい、一昨日の夜、リキシヤに揺られてうろうろと宿を捜した西湖（シーフー）の方へ歩き始めた。

静かな紹興の街から戻ってみると、杭州は大都会なのだった。ひっきりなしに行き交うバスや自動車の騒音も激しく、商店のにぎわいも、行き交う人々のひしめきも、まさしく浙江省の省部としての都会そのものだった。

やがて西湖に近づくと、繁華街の様相は観光地の様相に一変する。歩道

のそこここに近所の龍井（ロンジン）付から出張して龍井茶を売る女性たちがいて、声をかけてくる。

湖畔の公園では『西湖十景』を絵で解説したイラスト地図を抱えて声を上げる人たちが、西湖遊覧の船や手こぎボートの客引きがひっきりなしに声をかけてくるのだった。

歩いていると何人もがそれぞれのことを誘いかけるので、わけがわからなくなってしまうようになる。

ここは相手のペースにのまれてはいけないと思って、公園の売店でジュースを買い、紅梅を一服した。その間にも、しつこい客引きは決してあきらめずに何やら分からない言葉を発し続けるのだった。

ふと脇を見ると、売店のそばに何かのチケットを売る窓口があり、何人かが集まっていた。どうやら国営の遊覧船のチケット売場らしい。

国営の遊覧船ならばばられることもないし、しつこくつきまとわれることもないと思って、六元のチケットを買った。それを見て、ようやく客引きたちもあきらめたようだった。

遊覧船は五〇人乗りくらいのボートで、すでに次に出発する船にはあらかた客たちが乗り込んで出発を待っていた。急いで乗り込み、やがて満員になると、船は西湖に滑り出した。

船にはおそらく中国の各地からの観光客だろう、家族連れや若いカップルたちの声が飛び交っていた。観光客たちの浮き立った気分をうつされて、次第に僕の気分も浮き立ってくるのだった。

西湖は観光地なのだった。

約九〇〇年前、北宋の詩人、蘇東坡は西湖を美女、西施にたとえてその美しさをたたえた。蘇東坡はさらにその美しさに華を沿えるように、西湖を渡る全長二・八キロにも及ぶ堤の建造を自ら指揮し、あるいはまた数多くの西湖にまつわる詩をつくり、その美しさをたたえた。

だが、当然のことながら、蘇東坡の視界には、西湖観光のポイント（それは『西湖十景』と名付けられている）にひしめきあう観光客たちの姿は入っていない。同様にして、観光客たちを目当てにして、小商売に精をだす無数の人々（ボートの客引きや、地図売りや、お土産物屋や、写真屋や、リキシヤの運転手や、タクシーの運転手や）の姿は入っていない。

西湖は観光地なのだった。

そして僕は観光客なのだった。

遊覧船は二〇分ほどで、西湖の真中にある小島に着いた。『西湖十景』のひとつ「三潭印月」として知られる、島の中に池のある小島だ。

国営の遊覧船は湖岸に設けられたいくつかの乗り場から出発し、湖の

真中にあるこの小島を目指し、またいくつかの乗り場に客を乗せて帰るのだが、従って、時間帯によっては圧倒的に輸入超過状態になり、小さな島に観光客があふれるということになってしまふのだった。

遊覧船を降りたとたんに僕が目にしたものは、帰りの遊覧船を待つ人々の長い行列だった。

小道を歩いていくと、カメラポイントには写真屋たちが陣取って、声をかけている。西湖には何の関係もなさそうなオモチャやアクセサリを売る小さな売店、アイスクリームやジュースを売る売店には人が群がり、若いカップルは写真を撮りあつたり、ひたすらくつきあつたりしている。島中の池には蓮の花が咲き誇り、それは美しい眺めだったけれども、池を十字に渡る橋にも観光客があふれているのだった。

いささかうんざりしながら、人ごみを避けて、西湖の北方、蘇堤の方を眺めていた。

微かに小波を打つ湖面は午後の光を反射して輝いていた。木の葉のような小船が浮かんでいる。ずいぶん遠くに、湖面をほうような蘇堤の姿がそれと認められた。蘇堤の向こうには、近くの木立は緑に、遠くの山並は青く、横たわっていた。

もしも、純粹な視線だけになったとしたら、と僕は考えていた。

もしも、背後の人ごみや、観光客としての自分という存在や、その自分のさまざまな物思いや、そういったものを一切捨象すれば、もしも、純粹な視線だけになったとしたら、あるいは蘇東坡のように感じるかもしれない。だが、西湖はあまりにも観光地として整えられすぎ『西湖十景』など風景を受け止める感受性さえも用意されて、観光客を待ち受けているかのようなのだった。

小島から蘇堤に渡り、両脇に湖をひかえる蘇堤の並木道を歩いた。それはもちろん美しい風景なのだったけれども、とても人工的な臭いがした。僕はむしろ、紹興郊外の田園地帯の運河で小舟を浮かべていた農夫の姿の方が共感できたのだった。それはもしかしたら、自然というものを美しいと感じる日本的な感性なのかもしれないのだけれども。（もちろん、蘇堤も運河も人工物には違いないのだけれども、見られることを予定に入れた人工性、化粧のような感じとでも言えればいいだろうか。）

西湖をあとにして、路線バスに乗って、六和塔（リニューハーター）に向かった。

六和塔は、九七〇年の建造、呉越王が大逆流で知られる銭塘江を鎮めるために建てた木造の塔で、中国の国宝に指定されている。

いつかテレビ番組で、銭塘江の大逆流を特集して放送したのを見た

きには、ちつぽけな塔だと感じたのだけれども、高さ約六〇メートル、断面は六角形で、外から見ると一三層の大建築物なのだった。

六和塔のふもとには観光バスが列をなして止まり、ここにも観光客があふれていた。入場料は六元もしたけれども、見物もそこそこにして、銭塘江のほとりで息をついたのだった。

大逆流のときには龍のように暴れる銭塘江は、静かに流れを運んでいた。ときおり、エンジン音を響かせながら、川船が通り過ぎた。黄色いカーヌーが一艇、川岸付近を行ったり来たりしていた。

僕はふと、観光と旅のことを考えていた。僕は観光に来たわけではないのに、どうしようもなく観光客になってしまっているのだった。だけど、観光とか旅とか、どのようにして区切ることができるのだろうか。そもそもあらゆるめずらしい場所、物が観光地になり、観光物になってしまっている現代、旅というものは成立するのだろうか。それでも成立するとすれば、それはどういうことなのだろう。旅は観光と一致するのだろうか。それとも全く異なる次元で成立するのだろうか。

すでにマルコポーロやコロンブスの旅は成立しない。河口慧海(チベット旅行者)や空海、玄奘の旅も成立しない。おそらくは松尾芭蕉の旅もまた。それでも旅は成立するのだろうか。

僕はたぶん中国を旅しながら、旅を捜すことになるのだろうか、と思う。

※

西湖と銭塘江をあとにして、路線バスを乗りついで、杭州客運碼頭へと戻った。

候船室にはすでにたくさん中国人たちが乗船を待って、行列をつくっていた。

チケットは確保してあるので別にあわてることもないと思って、いったん候船室を出て、ターミナル広場の片隅に店を出していた快餐屋で弁当を買い、階段に腰を下ろして、食べた。

無心に快餐をむさぼっていると、目前にパトカーが止まった。何だろう、と見ていると、刑事らしき男が容軽者らしき手錠をされた男を連れて降り、背後の建物へと入っていく。よく見ると、ターミナルビルのその一角は警察署になっており、僕は警察署の前階段で快餐を食べていたのだった。別にそのこと自体は犯罪にはならないだろうけれども、どうにも居心地が悪くなって、僕はそそくさと食べ終えて、候船室へと戻ったのだった。

行李寄存処で荷物を受け取って、候船室の行列の後尾についた。行き先別にいくつかの行列があり、それぞれの出発ゲートには行き先と出発時

刻が揭示されていた。行列の人々は椅子に腰を下ろしてぐったりとしていたり、カッププラーメンを食べていたり、雑誌に目をおとしていたり、あるいは椅子のない後尾の人たちは、ぼんやりと我慢強く出発ゲートが開かれるのを待っているのだった。

候船室の入口では、大きな鍋でゆでた卵を売っていた。鍋の中は茶色いスープで、ゆで卵もまた茶色いものだった。中国人たちはひとり、ふたりとその鍋に近づいて、茶色いゆで卵を買っていく。おそらく船中でおやつ代わりに食べるのだろう。

茶色いゆで卵を数個入れた袋を手にして、ひしめく中国人たちに押し潰されそうになりながら、僕はまるで自分がウンコになったような気がする。出発ゲートが開いて、スタッフが改札を始めると、まるで何かに憑かれたかのように、突然、行列の人々は急ぐのだ。人々の急ぐ気持ちは後尾の方はそれほどでもないのだが、ゲートに近づくにつれて指数関数的に高まっていく。一方改札ではひとりのスタッフがひとりひとりのチケットを確認するものだから、改札付近はまさにフン詰まり状態になる。

「コンチクショウ。押すな、押すな」とか

「コラ！ 横入りするな！」とか、中国語ができないので、頭の中で呟きながら、フン詰まりをもがききると、ようやく改札を抜けて、まさしく、ポトツと埠頭に落ちるのだ。

埠頭に吐き出されて、ほっとひと息をつく間もなく、僕は呆然とする。

あとから考えてみると何の根拠もないのだけれども、一泊の船旅なのだからと、僕は漠然と瀬戸内海のフェリーのような船を思い浮かべていたのだった。しかしそのとき埠頭に停泊していた船は、まさしく川船なのだった。

二〇メートルくらいの長さの小さな平底川船が数艘、運河にプカブカと浮かんでいた。それぞれの川船の乗船口にはそれぞれの等級が掲示してある。つまり、ひとつの船の中にそれぞれの等級の場所があるのでなく、それぞれの等級に従って船の構造自体が違うのだった。そして、あとで分かったことだけれども、これらの船は、その後尾と先頭をつなぎあわせて、数艘がひとつつながりになって航行するのだ。

僕は、自分は島国の人間なのだ、と思う。僕にとって客船とは海を航海する船なのだ。川船の客船などは頭の中にはなかった。荷を運ぶ船としては川船も考えられないことはないのだけれども、それとても川をくだり、あるいはさかのぼる船なのだ。ところが、実は杭州と蘇州をつなぐ川などはないのだ。ただ張り巡らされた運河が両者をつなぐだけなのだ。つまり、人々が交通のために道路網を張り巡らせるように、中国人たちは運

河を張り巡らした。そして現代でも運河は中国人たちの主要な交通路のひとつなのだ。

かつてはおそらく日本でも、荷の運搬のために運河が利用された。特に、大阪には運河が多かつたらしい。しかしそれにしても運河は都市と都市を結ぶような大規模なものではなくて、都市内部を運搬するための規模の小さいものだった。日本の都市の多くは海岸沿いに位置し、都市と都市との交通は海を利用すればよかつたからだ。そのうちに時代が下ると、交通は船よりも陸路を利用した列車やトラックが圧倒するようになった。

しかし中国は大陸なのだ。内陸部と沿海部の交通は長江などの大きな川を利用し、あるいは大きな自然川沿いに都市は発達したのだろうが、自然川と自然川をつなぐ交通路として運河は不可欠のものだったのでろう。とくに江南地方の地図を見ると、縦横に張り巡らされた運河はほとんどの街をつなぎ、その交通路としての重要性がうかがわれる。もちろん、運河は交通のためだけではなく、灌漑や水災害の予防などの目的のためにもつくられているのだろう。

どちらにせよ、数艘の川船をプカプカと浮かばせた運河、それは京杭運河と名付けられていたのだが、それを航行して杭州から蘇州へ行くことができるということ、あたりまえのようだけれども、実は驚くべきことなのだ。

ついでに驚くべきことは、さすがに四等というべきか、船に乗り込むと二段ベッドが向かいあってひとつの区画をつくり、それが通路の両側に続いているのだけれども、それだけなのだ。薄暗い通路を歩いていくと狭いトイレがあり、その先に調理場。二階には洗面所とあとはまた二階のベッドだけ。ベッド以外にいるべき空間はない。列車やバスの移動とはちがつて、広々とした空間を当てにしていた僕はカウンターパンチをくらって、ベッドに横になったのだった。裸電球が黄色い光を投げかける狭苦しい船室のベッドで。